

SONRISA

そんりさ

vol.182



第5区の森林伐採現場に置かれた「マヤ密林を護るぞ」とSOS

「マヤ鉄道」建設は国家の安全保障問題？

- | | | |
|----|-----------------------------|------------|
| 02 | 「マヤ鉄道」建設は国家の安全保障問題？ | …小林 致広 |
| 04 | グアテマラ 土曜学校視察 | …新川志保子 |
| 05 | レコム創立 30 周年 | …新川志保子 |
| 08 | 回想のラテンアメリカ アルゼンチンへ | …唐澤 秀子 |
| 10 | ペルー音楽 アンデス諸国のケチュア語ラップ | …水口 良樹 |
| 12 | ラ米百景 アヨツィナパ事件は国家犯罪ーメキシコ政府断定 | ……伊高 浩昭 |
| 14 | メキシコ料理 タンピケーニャ | …ミゲル・アクーニャ |
| 15 | ムネちゃんの LA 情報拾い読み・斜め読み | ……小林 致広 |

2022 年 10 月 23 日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

「マヤ鉄道」建設は国家の安全保障問題？

小林 致広

2022年7月18日、メキシコ大統領ロペス・オブラドール（以下 AMLO と略）は、「マヤ鉄道」計画は国家安全保障と密接に関連する事業であると宣言した。この宣言は「マヤ鉄道」計画に対する工事差止請求は国の安全保障を脅かす反国家的行為と規定することで、AMLO が目標とする 2023 年末の営業開始の大きな障害となってきた工事差止請求をすべて法的に無効にしようとするものだった。

2022 年 5 月、環境保護団体などが提出した第 5 区南部の工事差止請求は連邦裁判所ユカタン支部によって認められ、第 5 区の森林伐採作業は 3 か月ほど中断していた。しかし上記の宣言以降、連邦裁判所は、採択されていた第 5 区の 6 件の工事差止請求を次々に棄却した。8 月初旬には予定路線上の森林伐採が再開され、路線周辺の土地に対する接収命令も出された。

マヤ鉄道計画とは

AMLO は、大統領選挙運動の期間中の公約の一つとして、国際的リゾート地カンクンからグアテマラ国境沿いの密林地帯を横断し、マヤ遺跡パレンケに至る 890km の「半島横断観光鉄道」の建設を掲げていた。当選決定の直後の 2018 年 8 月、それにユカタン半島北部の海岸沿にある既存の鉄道 664km の複線・近代化を加え、総延長 1,554km の鉄道を建設する「マヤ鉄道」計画を公表した。

「マヤ鉄道」計画では、気候変動との闘いに貢献することが謳われ、環境保全に努める方針が強調された。温暖化ガス削減のためメリダからチェトゥマルの間約 700km の電化、パレンケからバジャドリール間は既存の鉄路を利用し植生伐採を行わないこと、鉄路を新設するカリブ海沿いと密林区間では伐採した以上に植林（4.57 億本）を行うこと、自然保護区約 1 万 ha を新設することなどが強調されていた。

計画公表のから現在まで、「マヤ鉄道」のルートは何度も変更された。2019 年、バジャドリールからカンクンに至る第 4 区は、経費節約を名目にバジャドリールとトゥルムを結ぶものになった（注 1）。既存の鉄路の拡幅・複線化が基調だった第 2～4 区のカンペチェ、メリダ、バジャドリールなど市街地を通過する案は撤回された。第 5～7 区では、国道脇を拡張し、鉄路を敷設する方針がとられた。カンクン



マヤ鉄道計画の予定路線

～トゥルム間の第 5 区では、建設費節減や工事中の観光客減少を懸念するホテル業界の反対を考慮し、海岸から 8 km 内陸側にルートは変更された。

見せかけの「住民協議」と公開入札

大統領就任直前の 2018 年 11 月、「マヤ鉄道」や地峡部開発、ドス・ボカス製油所、全国植林計画など AMLO 政権が掲げる優先的計画に関する全国住民協議が実施された。選挙登録者の約 1% に相当する約 94 万人の協議参加者の「マヤ鉄道」の支持率は約 9 割だった。1 年後の 2019 年 11・12 月には、南東部 5 州（チアパス、タバスコ、カンペチェ、ユカタン、キンタナロー）で、「マヤ鉄道」計画に関する「住民協議」が「先住民事前協議」として実施された。選挙登録者約 350 万人中約 10 万人が参加した「住民協議」（参加率 2.86%）では、マヤ鉄道計画は約 92% の支持を受けたとされる。

しかし、一連の住民協議では、「マヤ鉄道」計画に関する基本的情報（具体的計画案、社会・環境評価報告書など）は提示されず、協議参加者も共同体権威者などに限られていた。当時の環境自然資源省大臣ビクトル・トレドは、住民協議が国際的基準を満たしていないとして、社会・環境評価書に基づいた第二次協議を先住民共同体で 2020 年 7 月から実施する方針を示していた。しかし、2020 年 8 月末の彼の辞任で第二次協議は実施されなかった。

第 1～4 区に関しては、2020 年 5 月までの国際入札で、メキシコ系企業（カルロス・スリム傘下の

グループ・カルソ、グループ・イカ、グループ・メヒコ)のほか、スペイン系企業(アクシオナ)、ポルトガル系企業(モタ・エンヒル)、中国系企業(中国交通建設)などが受注した。新たに鉄路敷設が必要な第5区はグループ・メヒコとアクシオナが受注していたが、2021年3月に契約はキャンセル、第6・7区とともに国防省が担当することになった。

数多くの工事差止請求

2019年11・12月の南東部5州での住民協議の実施直後から、工事差止請求は各地の裁判所に提出されていた。最初に工事差止請求を出したのは、最後に工事が行われる第7区(単線区間)に位置するカンペチェ州カラクルム行政区の住民だった。行政区東端の22共同体で組織されるイシュピル先住民民衆地域協議会(1995年組織、全国先住民議会構成員)は、選挙登録者15%しか参加しなかった12月の「住民協議」は国際基準を満たさず無効として、カンペチェ州内の工事差止請求を2020年1月6日に州裁判所に提出した。裁判所は差止請求を受理したが、3月3日にその範囲は州全域でなく行政区という裁定を下した。

一方、第3区のマヤ系先住民が組織した「マヤ領域防衛者会議(Múuch' Xíinbal、「ともに歩もう」の意)」やチュウンタン・コレクティボ(Colectivo Chuun't'aan、「言葉を寄せ合おう」の意)は、2020年5月に工事差止請求を提出し、州裁判所は2021年2月に請求を採択した。同時期、2020年6月の環境評価書をめぐる住民協議の不十分性を指摘して、メリダやイサマルなどの都市住民が提出していた差止請求も採択されていた。工事を担当するトゥーリスモ推進全国基金(FONATUR)は、第1～3区の工事差止請求受理に関して異議申し立てを行った。2022年3月25日、最高裁は第1～3区の工事差止請求棄却という裁定が下された。

新規に鉄路を敷設する第5区に関しては、2020年5月に実施された土地地質調査で地盤の脆弱さが指摘され、北部約43キロの7割約30キロを高架にする必要があると指摘されていた。工事の難しさや経費の問題から、2022年1月に路線変更が発表され、決まっていた工事受注業者は取り消され、国防省が担当することが発表された。本来の手順では、協議実施、土地利用名目変更と環境インパクトの解決を経て、初めて植生の伐採可能になる。第5区では環境評価報告が未提出の段階で、国防省傘下のフェリペ・アンヘレス工学グループによって工



路線上に見つかった幅500m、奥行き1kmの洞窟



洞窟から見つかった先スペイン期の墓壇

事は始まった。2022年1月には予定路線上の原生林が約30mの幅での伐採が始まり、2月に伐採された路線上に複数の陥没が発見された。

これらの陥没箇所は、半島のカルスト地形の下に広がるカリブ海まで続く地下水路網上に位置するセノーテや洞窟だった。それらの洞窟からは先スペイン期のマヤ文化の遺物や遺跡も発見されていた。3月22日の「世界水の日」から環境保護運動グループは、「Sélvame del tren」という工事反対キャンペーンを展開し、生物多様性センターとグリーンピースは、貴重な地下水路網の破壊になるとして、2022年4月に工事差止請求をキンタナロー州裁判所に提出した。同様の工事差止請求は健全化環境権防衛協会(DMAS)によってユカタン州裁判所にも提出された。これらの工事差止請求はいずれも5月に採択され、植生伐採作業はいったん中断した。

AMLOは、第5区の6件の工事差止請求は米国資本が操るエセ環境保護活動家による政治的策謀と激しく攻撃し、計画推進の障害となる差止請求を棄却するため、「マヤ鉄道」計画は国家安全保障と結びついた国家事業と宣言したのである。

AMLOは2023年末の「マヤ鉄道」開通を宣言している。しかし最近ハッカー集団guacamayaが国防省からリークした文書では、第5区の難工事のため、2023年末の工事完了は無理とされていた。現時点では、密林部を横断する環境自然資源省の第6・7区の地質調査などに関する環境評価報告書も提出されていない。2023年末に一区間でも開通するということがすら難しいかもしれない。



第3区ユカタン州マシュカヌのレール敷設の工事現場



第5区プラヤ・デル・カルメン郊外の植生伐採

注1) 2022年10月時点のAMLOの記者会見で提示される地図では、いまだに原案のルートが表示されている。

10月1日に石川智子、新川志保子で、チマルテナンゴ県ポアキル郡で行われている土曜学級を視察しました。コロナ禍でこれまで訪問することができず、今回は実に2年半ぶりでした。視察には土曜学級を運営しているグアダルーペ協同組合の運営委員4人が同行してくれました。

土曜学級は、2012年にカトリック教会大阪司教区の支援を受けて始まり、支援が終了した後もレコムが寄付を集めて続けています。当初は3カ所でそれぞれ30人の子どもを受け入れて行っていたのですが、現在は規模を縮小して一カ所で続けています。今年は11年目となります。この11年で受け入れた子どもはのべ600人ほどになります。

昨年よりオヘル・カイバルという村で33人の子どもを受け入れて行っています。教師はエルサ・ヨヘーロさん、グアダルーペ組合の奨学金で教師の資格を取った人です。昨年は一度に10人以上の集まりはできないということで、クラスも三つのグループにわけて交代で授業をしていました。

しかし、今年は昨年より規制が緩み、村の小学校を利用させてもらえることになってより広いスペースが確保できたため、グループを二つにして行っています。通常だと5歳から12歳くらいまで（プレスクールから小学校2・3年まで）の授業を行います。今年は子どもどうしの間隔をあける、マスク着用などのコロナ対応が必要なために7歳以上の子どもをみの受け入れとなりました。

子どもたちの楽しみである給食は、残念ながら

今年も出すことができません。去年同様、その分の予算を子どもたちの家庭への食料支援に回しました。

この日は、事前に村に確認して特別に許可をもらって、子どもたち全員が集まりました。まず、二つのクラスの授業の様子を見せてもらい、それから広い屋外体育館に皆が集まりました。子ども達のお母さん、お父さんも私たちにお礼を言うために数人きてくれました。訪問した10月1日は、「世界こどもの日」（各国で祝う日は異なり、グアテマラは10月1日）ということで、私たちの訪問とともに特別な日になったようです。

レコムからは子ども達へのお土産としてクレヨンやボールのプレゼントがありました。そして、この日は特別におやつが出て、子ども達は大喜びでした。

昨年は小学校が閉鎖されていたので、この土曜学級が村で唯一の教育の場でした。父母だけでなく、村の運営決定機関からも感謝されました。その実績が評価されて、今年は小学校の施設を使わせてもらえることになりました。小学校は開かれるようになりましたが、授業は毎日2時間のみということです。

コロナ禍で土曜学級を開催するのはさぞかし大変だろうと思います。グアダルーペ組合の皆さんの「子どもに教育を」という熱意があればこそ、続けていられるのだということを改めて思った次第です。



授業の様子



運動場にて記念写真撮影



休憩時間 フラフープで遊ぶ

レコムは1992年（注1）に創立され、今年で30周年を迎えました。節目の年となりましたので、ここでレコムの活動を振り返ってみたいと思います。

海外青年協力隊として中南米にいった人たち、中南米に関心を持っている人たちが集まって勉強会を重ね、ラテンアメリカで社会的、経済的に困難な状況におかれている人々、そしてそれをはねかえすために運動をしている人々とのネットワークを築き、相互理解を深め、それを支援するために設立されました。当時内戦中であったグアテマラの状況が最も厳しいということで、活動の中心をグアテマラにすえることになりました（注2）。「軍による人権侵害も続いており、その中で活動している団体もまだまだ危険な状況でした。

グアテマラは人口の過半数が先住民族という国であり、先住民族、とりわけ先住民族女性の権利に関わる活動を支援することになったのです。

グアテマラでの活動

グアテマラでの活動は、まず「つれあいを奪われた女性たちの会」（コナビグア）を支援することから始まりました。コナビグアは内戦で軍により夫や家族を奪われたマヤ女性たちが集まって作られた団体です。先住民・女性・貧困という三重の差別に苦しんでいるうえに、内戦で寡婦になるというグアテマラ社会の中で最も弱い立場の女性たちが、軍による弾圧にも屈せずに闘っていたからです。

子どもたちに同じ苦しみを繰り返させないために、人権侵害をやめさせる、マヤの若者をターゲットにした強制徴兵に反対する、殺害されてそのまま埋められた人々の遺体を発掘して埋葬する（秘密墓地発掘）などの活動をすすめていました。そのような姿に共感し、その活動を支えようと考えたのです。

おりしもコナビグアへの同伴活動をするために日本から行った仲間もいて、密な連携を取ることができました。助成金などを使って、コナビグアの活動のための車両提供、子どもを預ける場所がないため活動できないメンバーのための託児所建



コナビグア共同代表ロサリーナ・トゥユクさん

設、農村部女性のための地域医療専門家の派遣、女性の政治参加のための組織化支援などを行いました。

コナビグア支援と並行して行ったのが、先住民農民団体コニックの支援です。歴史的な先住民族の集団の権利としての土地回復、そこでの経済基盤の確立、地域の自治などのために活動していました。レコムは農村開発のための専門家派遣や農業プロモーター支援などを行いました。

1996年12月に和平協定（注3）が調印され、グアテマラの長い内戦に終止符が打たれました。レコムも有志が「真の平和を！」という横断幕を持ってデモ行進に参加しました。



1996年12月和平協定調印時のデモ、中央に日本から持参の横断幕



1996 年和平協定調印時に持参した横断幕（日本で撮影）

他にも、先住民族の伝統的な住民組織があり、地方行政を住民の手に取り戻すために、その代表が市長に当選したサンティアゴ・アティトラン市を環境問題の切り口で支援しました。同市に環境専門家を派遣する、写真家を派遣して環境問題についての啓発写真展を開催するなどの活動も行いました。

グアテマラ内戦の被害を記録したカトリック教会の歴史的記憶の回復プロジェクト報告を翻訳し日本で出版するのに協力し（『グアテマラ 虐殺の記憶』）、それを記念して関係者を日本に招き全国スピーキングツアーを開催しました。

内戦が終わってグアテマラの状況も変わり、コナビグアやコニックの果たす役割も変化していく中で、レコムがより貢献できる支援とは何かを模索する時期がありました。この結果、先住民女性の経済的自立のためのプロジェクト（マイクロクレジット）、初等教育へのアクセスがまだ難しい農村部のコミュニティ教育支援（土曜学級）を開始しました。

この二つのプロジェクトはチマルテナンゴ県で内戦の被害女性が作ったグアダルーペ協同組合が運営しています。マイクロクレジットは軌道に乗り、年に 60 人ほどに貸し付けを続け、地域の貧しい女性たちの経済的自立を促進しています。土曜学級は、当初は 3 クラス 90 人の子どもを受け入れて始めましたが、現在は 1 クラス 30 人で続いています。今年で 11 年目、のべ 600 人の子どもを受け入れました。

内戦中に軍による性暴力の被害を受けた女性たちの正義を要求する闘い（「戦時下性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクト）の支援も続けています。これは 2009 年に松井やより賞を受



秘密墓地発掘の様子

賞し、それをばねに 2010 年には民衆法廷を開催しました。そして 2016 年には、被害女性 15 人が集団告訴し、グアテマラ国内で戦時下性暴力を裁く初めての裁判を行い、国と軍の責任を認める画期的な有罪判決を獲得しました。



2016 年戦時下性暴力を裁くセプルサルコ裁判判決

2017 年には、サンティアゴ・アティトラン市にある障がい者のための団体 ADISA への支援を開始しました。ADISA は障がいを持った子どもや若者をサポートし、その家族やコミュニティを含めた活動を展開して、インクルーシブな社会の創造を目標にしています。2020 年、新型コロナウイルスによって ADISA の活動も危機に陥りましたが、レコムは日本で緊急支援キャンペーンを行い支援を送りました。



ADISA のデモ行進



2009 年「変革の主体」日本全国スピーキングツアー

ニカラグアでの活動

ニカラグアのカリブ海自治地域における「多民族・多文化・多言語社会の創設」をめざす自治プロセスに注目し、その支援も行いました。自治を強化し、それを経済的に支えるための資源管理の人材育成を目的として 1995 年に創立された「ニカラグア・カリブ海自治地域大学 (URACCAN)」の活動を日本で紹介し、現地訪問ツアーなどを行いました。また、同地域のワスパン市における先住民女性団体ワンキ・タグニの活動支援（先住民女性の組織化・意識化および植林事業）も行いました。

日本国内での活動

1. スピーキングツアーの開催

レコムが支援するグループの代表を招き、スピーキングツアーを行い、その活動を日本で紹介しました。のちには

2. 人権侵害に対するグアテマラ政府への抗議ハガキ送付、グアテマラの新聞への意見広告掲載等を行いました。
3. グアテマラへの「人々と出会う旅」の実施などを行いました。
4. 大型ハリケーンで被害が出た時、コロナ禍などの時緊急支援を行いました。
5. ニュースレター「そんりさ」の発行、ラテンアメリカの民衆運動をビビッドに伝え、政治、経済、文化について幅広く日本語で読める貴重な情報を提供しています。現在年4回発行。

レコムとしての活動とは別に、会員にはメキシコのサパティスタ運動、行方不明者の家族団体、コロンビアの内戦で被害を受けた先住民の人々、エクアドルの環境問題などについて支援活動をしている方たちがいて、ニュースレターでの紹介やスピーキングツアーなどで協力しています。

以上、駆け足で 30 年の活動を振り返りました。ここに書ききれなかったこともありますし、試行錯誤もありました。資金難や現地情勢の変化により活動を停止しなければならないこともありました。しかし、貢献できたことも多かったと思います。「継続は力なり」と言いますが、これまで活動が続けてこられたのは、会員の皆さん、協力してくださった各個人・団体のおかげだと改めて思いました。ありがとうございます。

グアテマラもラテンアメリカも情勢は変わっています。会員の減少や高齢化など、レコムの活動もいつまで続けられるかわからない状況ですが、会員の皆さんや運営委員会で検討を重ねていければと思っています。

新川志保子（レコム運営委員）

*掲載写真はすべてレコム所蔵

注1：1992 年は国連により国際先住民の年と制定された。その年のノーベル平和賞はグアテマラの先住民運動のリーダーであるリゴベルタ・メンチュウさんに授与され、世界の先住民の状況とともに、グアテマラ内戦も世界の注目を集めた。

注2：グアテマラ内戦（1960～1996 年）

民主的改革が軍事クーデターで転覆されたことを原因として反政府ゲリラと軍による内戦が起こった。農地改革などの運動をしていた先住民グループもゲリラと同一視され、ゲリラ殲滅を目的として 1980 年代初頭に軍事政権による焦土作戦などが展開され、440 のマヤの村が消滅、20 万人の死者・行方不明者、100 万人を超える国内外避難民が出た。

注3：和平協定は 11 の協定で構成され、民主化と人権擁護、先住民の権利の保証、ガバナンス強化、社会経済的改革など幅広いものだった。が、内戦後の協定履行ははかばかしくなく、自警団の解体や初等教育での二言語教育など達成できたものもあるが、土地問題の解決や先住民の権利にかかわる根本の問題はほとんど手付かずのままとなっている。

新年を目前に私たちはふたたびリュックサックを担いで、お世話になったペペの家に別れを告げました。新年を一緒に過ごそうと引き止めてくれるペペたちの好意を振り切って旅立ったのは、ボリビアの滞在ビザが新年早々に切れるからです。スクレからポトシをまわって新年の2日間くらいを過ごし、アルゼンチンへと向かったのです。

ボリビアの国境を越え、アルゼンチンはフアイに着くと日差しの明るいこと。なにもかも白く輝いているような感じです。アースカラーが基調だったボリビアの色合いとはまるで違い、アンデスの世界から離れたと実感しました。

そして最初に食べた昼食！ボリビアでは、私たちがお金の少ない旅人だったせいもあるのですが、一般的にそう牛肉系の食事はしていなかったのはたしかです。キヌアとかチューニョとかオカイもなど、主食系のものがたっぷり入ったスープ煮という感じが多かったように思います。アンデスの高地では、こんな暖かい消化のよい食事がお腹に気持ちよく、美味しいと思い、楽しんでできました。

ところがこの普通の食堂で出てきたビステータの耳にはそのように聞こえてしまうのですが、ビステックつまりステーキのことです。が、たっぷりと大きく、かつ柔らかく、これがメインですよと、堂々とお皿にジャガイモ、トマトなどとともに出され、さらにワインもサイフォン（ソーダ水）とともに出され、え～、こんなに豪華な食事を？と驚きました。

旅人のわたしたちが入った食堂は安いところばかりに違いはないのですが、これまでのどの国とも違っていました。何がちがうかといって、まず入るとテーブルクロスなどかかっていない安い食堂でもメニューが出されます。そしてメニューをゆっくり丹念に眺めます。

私たちがさ～っと見て注文しようと声をかけると、何をそんなに急ぐの？食事の楽しみはメニューをゆっくり見て、何を食べようか考える、そこから始まるのですよ、と、小半時くらい眺めていなくてとはと、返されるのです。ゆっくりおしゃべりしながら、ワインを楽しみなが



サイフォンでワインを割る

ら食べなさい、と。またそのワインが安くて美味しく、コカコーラなどの清涼飲料より安いくらいの値段なのです。でも必ず一緒に出されるサイフォンで割ったり、交互に飲んだりし、そんなに大量には飲まないのです。そうやってデザートまでたいして豪華でない中身であったとしても、ゆっくり食事を会話とともに楽しむという習慣が根付いていることを感じさせられました。なんという余裕でしょう。

国境を越えてから滞在した町で印象に残っているのはサルタです。目下は経済的に困難な状況が起きているとしても、過去には非常に豊かな時代があり、1900年代の初頭に作られたブエノスアイレスのコロン劇場は、現在でもフランス・パリのオペラ座、イタリア・ミラノのスカラ座と並んで、世界3大劇場と称されるほどののです。

その時代の豊かさはサルタで泊ったホテルからも伺われました。ホテルには外にも開かれた食堂を備えたところがよくありますが、ここでも入口こそ小さいけれど、中に入るとゆったりとした食堂と予備の部屋があり、そこを通りぬけて中庭に出ると回廊にそってきれいなカーテンのかかった窓、どっしりとした扉が並び、中は広くて明るくて居心地の良い部屋です。高い高い天井に古典的なレンガの壁、大きなベッドと一人用のベッドの2台、テーブル、椅子が2脚、タンスが備え付けられていて、ボリビアの宿とはなんて違うのだろう！部屋の明るさがこんなに気持ちのよいものだったとは。

いくらアルゼンチン・ペソの価値が下がっているとはいえ、私たちが泊まれるような料金でこれです。しばらくここでゆっくりしたい

という気持ちが湧いて、われながらびっくりしました。

さて、宿を決めたら、まずすることはドルをアルゼンチン通貨に変えることです。わたしたちがアルゼンチンに入ったのは1976年の1月です。軍部によるクーデターが起きたのは同年3月ですが、警察の建物の前には土嚢が積まれているところもあったりして、不穏な感じがありました。このころすでにインフレが進行していて、経済状態は相当に混乱していたようでした。新自由主義経済の導入は非正規雇用問題、貧富の格差の増大などの問題を引き起こしていたのです。

この時の1ドルは正規の交換ルートで115ペソでした。日記の記録によると、ステーキ用牛肉2キロ80ペソ。ぶどう1キロ50ペソ。トマト1キロ15ペソ。私の靴100ペソ。街角で見た求人広告によると、家事労働者で仕事は清掃、料理、子守りで一ヶ月8千ペソ。宿代は記録がなくて分からないのですが、わたしたちが出せる金額ですから、そんなに高いはずはなかったと思います。

サルタの中心地を歩いていると、白人ばかりの街のように思われるほど、先住民の姿をほとんど見ることはありませんでした。中心地からほど遠い民芸品のメルカードへ行ったとき、先住民らしい風貌の人びとに何人か出会ったくらいです。アルゼンチンはスペインからの独立後、広大な草原に目をつけ、牧畜を営むために住んでいた先住民をほとんど絶滅するまでに虐殺した歴史がありますが、どれほどのものであったかが現れているのかと思われるのです。

サルタから首都ブエノスアイレスまで車で移動しましたが、車窓から見える景色はどこまでもどこまでも広がる草原。牛の群れ、ときどき巨大な豚が草を食んでいる…ところどころに灌木が生えているが、ほかに目に入るものもない。高地のアンデス地域になれた目には穏やかな豊かな大地、無数の家畜を育てる地力を感じさせる大地と映るのです。ガウチョ小説として有名な『ドン・セグンド・ソンブラ』の登場人物たちが牛の群れを追って縦横無尽に走り回るのも、こんなパンパがあればこそ。これまで見たこともない広大な草原に、ふとため息が出るような思いがしました。

サルタからトゥクマン、コルドバと首都に近

づくにつれ、最初の牧歌的な風景はどんどん薄れ、ブエノスアイレスに着いたときは、は～、また都会へ来たと感じたものです。西も東も分からず、タクシーの運転手に安い宿のある界限を教えてもらい、そこで宿を探しました。

このあたりのホテルは、家族で住んでいる人が多く、1950年から1970年くらいの東京の台所、洗面所共有のアパートのような形態です。ただ建物は古い年代物で、部屋がずらっと廊下に面して並び、出入り口があるだけのものです。この建物の形態はボリビアのラパスでも、エクアドルのキト、エルサルバドルの首都でも同じでしたから、植民地時代の建物をそのまま手入れをして住み続けているのではないかとも思いました。

台所が共有なので、ホテルの住人とだんだん顔見知りになり、何人かと親しくなりました。アルゼンチンではマテ茶がとても好まれ、数人いればマテ茶を回し飲みしながらおしゃべりに興じます。はじめは同じ金属製のストローと一緒に使うのはちょっと抵抗があったのですが、いってみれば友達承認のような感じでしょうか、だんだん慣れました。

どうしても慣れなかったのは、たっぷり入れる砂糖の味です。彼らも私たちが砂糖を入れて飲むのをあまり好まないのを知って、ちょっと控え目にしてくれるなどしてくれるのです。美味しいマテ茶は緑茶の風味に通じるものがある、いまでも懐かしいマテ茶タイムです。

この3階建てくらいのホテルには何組くらいの家族が住んでいたのか思い出せないのですが、住人の顔ぶれはじつに多様でした。親しくなったメンバーだけみても、一番年かきのドニャは1940年代にスペインから移住してきて、ここで結婚し、いまは家族4人、若いカップルはウルグアイから、もう一組はアルゼンチン人とチリ人、時々顔をみる若いパラグアイから働きにきた青年、そして日本人旅行者の私たち、



マテ茶の回し飲み

この多様さは南米の事情、それを受け入れるアルゼンチンの在り方を表しているのかもしれない。

アンデス諸国のケチュア語ラップ

日本でも若い人たちがあげる好きな音楽にヒップホップなどのラップ系音楽がかなり主流になってきた昨今、レゲトンで注目されるスペイン語圏ラップの世界は、今やアンデス先住民言語ケチュア語でもさまざまな試みが始まっている。今回はそんなケチュア語ラップをペルーの枠を越えて少し紹介してみたい。とはいえ、もともと私自身まったくもってラップに詳しいわけではないので、何やら変な表現や理解不足があるかもしれないが、そこはどうぞにっこりスルーして、あとでこっそり教えていただければうれしく思う。

まずはペルーからだ。トップバッターとしてはリベラト・カニから紹介しよう。ヒップホップ・ケチュアと銘打って活動している彼はリマ生まれ。本名はリカルド・イルデマロ・フローレス。もともと幼少期はスペイン語のみで育っているのだが、9歳の時に母親が亡くなり、しばらくアンデス高地のアプリマック県アンダワイラスに暮らす祖父母の元に預けられた。そこで暮らした12歳までのあいだにケチュア語を身につけた彼は、リマに戻った後、ラップに興味を持ち、徐々に当時まわりで誰もやっている人がいなかったケチュア語でラップをするということをはじめたのだという。

とはいえ、幼少期の自分同様、ケチュア語の分からない人が多数派であるリマでの活動、バイリンガルのラップや、ケチュア語字幕を紙芝居的につけるなど、ケチュア語をきちんと伝えられる方法を模索しながらやっていたようで、それもまた非常に好感度が高い(それも初期はデジタルでオシャレな方法でなく、紙芝居という意外とアナログな方法をとっているのがなんだか好きだ)。

彼はこれまで、2016年に「リマイ・プエブロ：民衆の声」、2021年に「パワスパイ」をリリースしている。リマ育ちだけあり、彼の作品はスペイン語とケチュア語を行き来しつつ、音楽的要素としては、ロックやアフロペルー、アンデス、はてはアマゾン地域までさまざまな音楽的要素が取り込まれている。アンデス音楽にしても、ハサミ踊り、チャランゴ、サンポー



リベラト・カニの2つのアルバム

ニャ、サックス、アルパなど、さまざまなアンデス地域の楽器や踊りなどを使用しているが、単に切り取って持ってくるのではなく、その世界観も含めてどう取り込んでいくかに挑んでいる感じがして好感度が高い。

ちなみに彼のアーティスト名であるリベラト・カニは「自由を愛する人」という意味だ。また、ケチュア語を歌うことで海外からの注目もあり、これまでにドイツ、キューバ、チリ、スペイン、エクアドル、アメリカでのツアーも行っている。

そしてもうひとは女性歌手だ。レナタ・フローレス・リベラは、アヤクーチョ生まれで、14歳のときにマイケル・ジャクソンの曲をケチュア語で歌ったものをネットにアップして一気に注目を集めて歌手となった。以降ケチュア語と歌唱力を武器に活動を行う中で、次第にケチュア語のラップで評価を得て、今やケチュア・ラップの女王と呼ばれている新進気鋭の若手シンガーだ。

彼女はリベラト・カニとは違い、ラップ一辺倒というよりはもっと歌寄りで、彼女自身の歌唱力を非常にうまく使いながら活動しているのが印象的だ。すでにムシカ・クリオージャの



レナタ・フローレス

女王エバ・アイジョンや人気サルサ歌手のダニエラ・ダルコートなどペルーのトップ歌手との共演もこなしており、彼女自身の評価と人気の高さが伺える。これまでにシングル5枚とアルバム1枚を出している。

私が彼女の歌に驚いたのは2018年の「ティヘラス(ハサミ)」で、ペルーの魔術的舞踊ハサミ踊りをフューチャーしたトラップ(ラップの一種)の曲で、なんかスゴイ人が出てきたなど驚いたのを覚えている。2021年のアルバム「イスクン」はペルーの歴史をケチュア・ラップで描いた意欲作でPV発表されているそれぞれの曲を見ても相当こだわり抜いて制作されている。個人的にはインカ帝国の征服者フランシスコ・ピサロの娘フランシスカ・ピサロをテーマにした曲は非常に興味深かった。

知名度が上がっても、自分の原点であった好きな曲をケチュア語バージョンで歌うという活動は続けていて、最近では韓国のBTSの「ミクロコスモス」をケチュア語で歌っている。K-Popがケチュア語でカバーされるなんてやっぱり時代が変わったんだなと感慨深いものである。その他、クスコからクタイやコスコルナ、ダスメン・エル・ディブなどがそれぞれケチュア語でのラップ活動を行っているが、上記2名にくらべると知名度も活動もまだまだずっと小規模で、これからに期待したいところ。ペルーのケチュア語ラップは二強時代であり、他の活動はまだまだメジャーになれていない途上にある、と言えるようだ。

さて、次はケチュア語ラップがもっとも盛んな地域と言ってもいいだろうエクアドルを簡単に紹介してみよう。エクアドルは、おそらく先住民オタバロを中心にキチュア(ケチュア)語ラップがもっとも盛り上がってラッパーの数も多い地域だ。個人的に一番好きなのはラ・マフィア・アンディーナ(マフィアンディーナとつなげて書くことも多い)。ぶっそうな名前だが、女性ラッパーのタキ・アマルがDJミックスと組んで女性への暴力などの問題をラップで闘っていくために結成した(タキ・アマルはソロ活動も活発だ)。

エクアドルは他のアンデス地域に比べるとサヤナ、ナイリなど女性のラッパーが多い印象を受ける。もちろん男性も多く活動している。インモルタル・クルトゥラ、ロス・ニン、カウサイ、ドン・ナディエ、サマイなど数多くのラッパー(多くはヒップホップ)がいる。また、ペルーとは異なる形で音楽的にもアンデス世界をきちんと意識していて、特にオタバロの人々は彼らの舞曲サンファニートをバックに



マフィア・アンディーナ



ニナ・ウマ

したものが多くみられる。ちなみにリベラト・カニはエクアドルのケチュア・ラッパー達と共演もしていて、こうした連帯が今後増えてくればいいなあと思っている。

ボリビアはケチュア語だけでなく、アイマラ語のラップもあるようだが、こちらはまだまだ発展途上という印象は強い。カイピ・ラップやナシオン・ラップが代表的だろうか。ナシオン・ラップはペルーのロック歌手ミキ・ゴンサレスが好きで彼の曲をバックにラップしている曲が多く、思わずニヤツとしてしまう。女性ラッパーのニナ・ウマはアイマラ語で活動している反骨ラッパーだ。

最後にアルゼンチンのケチュア語ラッパーも紹介しておこう。アルゼンチンのコルドバを拠点に活動している女性2人ワイラとアマルーによるアウカ・ヌナだ。最近は特にワイラの活動が中心になっているのかもしれない。反骨精神とルーツにこだわった作品は、数は少ないながら完成度が高く、注目していきたいラップバンドだ。

こうした先住民言語によるラップは今どんどん増えてきている。南米大陸ではマプーチェやグアラニーによるものも増えてきている印象がある。そこで歌われている多くは、植民地主義や資本主義による差別と搾取の問題と、自分たちはそれに対してどう生きていくかという宣言という文脈を内包している。こうした問題は他人事として片付けられる問題ではない。

新自由主義は新たな支配と格差を生み出し構造的な植民地主義の強化を推し進めてネオファシズムへと接続しているともいわれているし、そもそも日本はかつて他国を植民地化しさまざまな暴力を行った側の国である。私たち自身がそのこととどう向かい合い、マイノリティの声を奪っている可能性と向かい合い、その声とどうつながり、ともに生きていける道があるのかを逃げずに考えていく、そこから始めるほかないのであろう。

アヨツィナパ事件は国家犯罪ーメキシコ政府断定

メキシコ・ゲレロ州イグアラ市一帯で 2014 年 9 月 26 日から 27 日にかけて、学生 3 人、巻き添え市民 3 人が警官隊に殺害され、学生 40 人が負傷、ほかの学生 43 人が拉致され所在不明になる重大事件が起きた。殺された学生の一人は顔の表皮を剥ぎ取られていた。学生たちは同州ティストラ市アヨツィナパにある「ラウル＝イシドロ・ブルゴス農村教師養成学校」(通称アヨツィナパ)に所属。首都メキシコ市で 10 月 2 日に催されるトラテロコ虐殺事件の記念行事の参加に必要となるバスを調達するため、彼らは確保済みのバスでイグアラ市まで乗り付けていた。調達とは無料使用をバス会社に吞ませること。アヨツィナパとバス会社の間にはそんな「仕方ない慣習」があった。

当時の大統領エンリケ・ペニャ＝ニエトは、事件をイグアラ市長、市警、およびゲレロ州内の麻薬マフィアのゲレロス・ウニードス (GU＝団結した戦士たち) など無法集団の仕業と偽って断定した。2014 年 11 月 7 日、それを「歴史的真相」として、検察庁に発表させた。事件は迷宮入りした。

だが事件解決を公約して当選したアンドレス＝マヌエル・ロペス＝オブラドール (AMLO) 現大統領は、捜査をやり直し、就任 4 年目の 2022 年 8 月 18 日、「事件は国家犯罪だった」と断言し、衝撃的な事実を公表した。大統領が重大事件で真相を隠さず公表するのは、インプニダー (無処罰) 万能のメキシコでは初めてのことでないか。アヨツィナパ事件の歴史的背景を振り返ろう。

メキシコ革命 (1910～1917 年) の成果として 1922 年、農村教師養成学校が全国の農村拠点に設置されることになり、最盛期には 30 校を数えていた。だが 1968 年の反体制学生運動を経て半減、現在、農村教師養成学校はアヨツィナパを含め 15 校と、先住民教師養成学校 1 校しかない。

最貧州の一つゲレロ州で、左翼教師を生み出すアヨツィナパは革新政治運動の中心だった。農村教師養成学校の学生はメキシコ社会主義農民学生連盟 (FECSM) の中核で、農村を基盤とする社会変革を志している。

アヨツィナパで教員資格を取得したルシオ・カバーニャスは、1960 代から 1970 年代にかけて、自ら結成に参加していた貧民党に飽たらず、ゲリラ戦を展開していたが、ルシオは 1974 年に陸軍部隊に殺害された。ヘナロ・バスケスも、アヨツィナパ出身の教員で、貧民党のシンパだったが、ゲリラ組織の革命的民族市民協会 (ACNR) を率い、陸軍や農村支配者と戦い、1972 年に殺害された。

今世紀になってから、アヨツィナパは、首都メキシコ市と太平洋岸の観光地アカプルコを結ぶ「太陽自動車道」の封鎖などで、州権力と戦ってきた。陸軍は、ゲリラ再登場を怖れる大地主ら権益階層の意向も汲んで、アヨツィナパに諜報員を学生として潜入させ、情報を収集していた。

話を戻そう。AMLO 政権は、アヨツィナパ事件を「連邦政府、ゲレロ州、イグアラ市、GU などの共謀による国家犯罪」とであると結論づけた。政権からは内務省、検察庁、国防省、海軍省、連邦警察が、州・市からは政府と警察が関与し、市政府と繋がる GU ともう一つの無法組織「ヘンテ・ヌエバ」(新しい一統) が殺害を実行した。学生 43 人は 6～7 人のグループに分けられて監禁、拷問、射殺、焼却され、遺骨は州内 6 ヶ所の川や谷に捨てられたとされる。

事件 10 日後の 2014 年 10 月 7 日、連邦政府とゲレロ州の検察、警察、軍の責任者らが、イグアラ市で極秘会合し、真相隠蔽の手順を決め

た。これを当時の大統領ペニャ=ニエトが知らなかったはずはない。付言すれば、連邦、州、市の検察・警察高官や駐屯軍幹部は、GU から巨額の麻薬マネーを受け取っていた。この収賄や麻薬密輸と事件との絡みを指摘する報道もある。

真相公表を受け、まず「歴史的真相」を打ち出しメキシコ全体を欺いていた当時のヘスス・ムリージョ=カラム検事総長が逮捕された。検察庁は2022年8月20日、①イグアラ市駐屯の第27陸軍歩兵大隊とテロロアパン市駐屯の第41陸軍歩兵大隊の軍人計20人、②ゲレロ州警11人、③ゲレロ州政府当局者5人、④ウイツコ市警26人、⑤イグアラ市警6人、⑥コクーラ市警1人、⑦GU要員14人、の計83人を指名手配した（その後、軍人16人を含む21人の手配が取り消された）。首謀者の一人、犯罪捜査庁元長官トマス・セローンがイスラエルに逃亡しており、AMLO政権はその身柄引き渡しを求めている。

また、事件当時、連邦警察のゲレロ州駐在代表だったオマール・ガルシアは、現在メキシコ市政府の治安担当長官であるが、2014年10月7日のイグアラ市での極秘会合に出席していたとされる。現メキシコ市長のクラウディア・シェインバウムは有力な次期大統領候補と目されているが、「ガルシア問題」は彼女にとって頭痛の種だ。

手配されていた軍人20人のうち、第27陸軍歩兵大隊の元司令官ホセ・ロドリゲス=ペレス退役中將（当時大佐）と、その部下だった大尉、少尉、軍曹の計4人は、2022年9月14日に軍当局に出頭した。この退役中將は、失踪した学生43人のうち6人の殺害を命じたという罪に問われている。

同大隊は兵士だったフリオ=セサル・ロペス=パトルシンを学生としてアヨツィナパに送り込み、スパイ活動をさせていた。このスパイ兵士は用済みになったからか、ほかの42人の学生と

もに殺害された。海軍はドローンを飛ばし、イグアラ市一帯での事件の推移を把握していたが、43人を見殺しにした。2014年当時の捜査過程で、事件の実行犯や証人など計26人が口封じのため殺害されたとされる。

事件から8年経った2022年9月、学生らの遺族は、AMLO政権による「国家犯罪」暴露を受けて、メキシコ市、イグアラ市などで大規模な抗議行動を展開した。遺族たちは、AMLO政権が事件当時の大統領、内相、国防相、州知事ら関係各部署の最高位者を裁判で有罪に持ち込むことを願っている。だが望み薄で、数多い事件の関与者がどこまで断罪されるか覚束ない。海千山千の政治家AMLOの本気度がわからないからだ。さらに、ペニャ=ニエト政権下の権力者らは、何を理由に、このような凄惨な事件を決行したのか、この謎は依然解明されていない。

私はメキシコでの記者時代に、国家が関与もしくは関与濃厚な事件をいくつも取材した。最大の悲劇は、グスタボ・ディアス=オルダース政権下（1964～1970年）の1968年10月2日に起きたトラテロルコ事件、次いでルイス・エチェベリーア政権期（1970～1976年）の1971年6月10日に起きたメキシコ市のカスコ・デ・サントトマス^{*1}（血の木曜日）事件だった。元大統領ディアス=オルダースは責任を認めず死んでいった。後任のエチェベリーアは2022年7月満100歳で死去したが、カスコ・デ・サントトマス事件と、内相として関与したトラテロルコ虐殺事件の責任を最後まで認めなかった。

編集部注1

カスコ・デ・サントトマスは、国立ポリテクニコ大学などがある文教地区。聖体の祝日（木曜日）にあたる1971年6月10日にロス・アルコネス（鷹）と呼ばれる武装集団が学生を襲撃、少なくとも120名以上が殺害されたとされる。

歴史と文化をちょっとだけふりかえりましょう。メキシコは31州と首都メキシコ市で構成される大きな国です。今回はメキシコ北部のタマウリパス州のレシピです。タンピケーニャ(Tampiqueña)という名前は、タマウリパス州最南の都市タンピコ(Tampico)に由来します。

この地域にさかえたワステカ文明は最古の文明のひとつで、1万2000年前から人々がすみはじめました。当時の人々はトウモロコシをつくっていました。この地域は米墨戦争によって半分を失なう前のテキサスの一部でした。

タマウリパス州は現在、米国のテキサス州との国境に接しています。この地域にはいま多くの

▽材料 (4人分)

- ・ステーキ用の牛肉 600g (ひとり 150g)
- ・塩
- ・こしょう
- ・サラダ油
- ・サフラン
- ・米
- ・玉ねぎ 小 1/8 個
- ・フリホーレスの缶詰 1 缶
- ・アボカド 1 個
- ・トマト 中 2 個
- ・コリアンダー
- ・レモン 1 個
- ・サワークリーム
- ・トト
ポス (コーンチップ)



工場があり、自動車産業はタマウリパス州の人々に多くの雇用をもたらしています。牛肉の輸出も重要な産業になっています。

▽作り方

- ①肉をいためて、塩こしょうで味つけ。
- ②サフランを水1カップにとかす
- ③米を洗って炊飯器にいれ、サフランをとかした水をくわえて炊く。
- ④玉ねぎをみじん切りにしてフライパンで炒め、フリホーレスの缶詰と水 1/2 カップをくわえて炒める。
- ⑤ワカモレを準備するため、トマトとコリアンダーを細切れに。レモンを半分に切って果汁をしぼる。
- ⑥アボカドをペースト状につぶし、そこにトマトとコリアンダー、レモン果汁をいれ、塩・こしょうで味をととのえる。
- ⑦肉、炊いた米とワカモレ、フリホーレスを大皿にもりつける。
- ⑧サワークリームをくわえて、コーンチップスをフリホールの上にかざる。

(1) チリにおける多民族性の拒否

制憲会議が起草した憲法案に関する9月4日の国民投票は義務化されたこともあり、投票率は85.86%と極めて高いものとなった。事前に予想されていた通り、拒否が承認を大きく上回った(拒否61.9%、承認38.1%)。国内346地区(comune)のうち承認が過半数となったのは8地区だけだった。伝統的に左派支持基盤だった首都圏でも、承認が過半数に達した地区は極めて少ない。しかしそれは憲法条文に対する拒否、制憲会議に対する批判であり、憲法改正そのものの拒否を意味しない。公正なチリ社会を目指してきた人々の政治的敗北だが、右派層にとって大きな勝利といえるものではない。

憲法草案は、先住民族の自治、環境保護、水資源公有化、諸機関・企業での男女平等参画、性的多様性認知、国民健康制度創設など、社会的権利を強調している点で世界的に見ても極めて進歩的なものだった。憲法草案には国民教育制度による私立学校廃止、社会保険制度による私的年金廃止、国民健康制度による民間医療制廃止が謳われているなど、過度の社会主義化を強調したフェイクニュースが拒否派のキャンペーンなどで拡散されていた。議会の男女対等割当制度、上院に替わる「地域議会(Cámara de las Regiones)」の設置、先住民枠議席設置、憲法改正住民投票の有効性などの政治制度改革に関する議論も意見が分かれるものだった。

とりわけチリを11民族で構成される多民族国家(plurinacional)と規定することへの違和感はかなりのものであった。こうした概念だけ先行する議論は、政治的に保守的とされるマプーチェやアイマラの先住民社会にとって馴染みのないものだった。先住民人口が7割超の9地区の拒否率は64~94%と全国平均よりかなり高いものになっている。

2020年の新憲法制定に関する国民投票(投票率50.9%)で2/3を超える賛成は、全有権者の3割に相当する。今回の国民投票で、承認派は票を積み増しできず、新たに投票した50%の人々が拒否を選択したことになる。

出典 <https://www.fastcheck.cl/> 2022年10月4日

(2) コロンビア・カウカ北部の土地問題

コロンビア・カウカ県(人口145万、290万ha)では、約35万(24%)の先住民のための先住民保留地として130万ha(45%)が存在している。しかし、カウカ北部地区(35万ha)では、先住民保留地は2万haで全体の5%に過ぎない。それは、地区北西部の平原の大部分が大土地所有者経営の製糖企業傘下のサトウキビ栽培地(約5万ha)であることに関係している。それらの製糖農場は、先住民族から篡奪した土地に成立し、主にハイチから強制連行された黒人が労働者として働いていた。

2005年のカロタの先住民による製糖農場の土地占拠は、1970年代以降の高原部の先住民による平原部の土地取り戻し運動の転換点である。現在「母なる大地の解放」と呼ばれる運動は約10万haの土地の取り戻しを企てている。2014年からはコリントなどでも土地占拠が始まり、現時点で30を超す農場が先住民に占拠されている。農場で働いていたアフロ系住民や農民も農地の分配要求を求めている。

土地返還委員会代表にカウカ先住民地域協議会(CRIC)のナサの先住民ジョバンニ・ユレを登用したグスタボ・ペトロ政権にとって、カウカ北部の農場占拠問題への対応は大きな試金石となっている。先住民族の要望を一本化するという大統領側の要請を受け、先住民族全国組織(ONIC)、CRICなど7組織が参加する先住民サミットが7月末にカウカ県シルビアで開催された。

土地接収はしないという約定を結んでいたペトロとフランシア・マルケス(当該地区アフロ系共同体出身副大統領)は、「暴力的占拠者」に農場からの48時間以内の退去通告を出し、8月末には弾圧部隊との衝突も起きた。10月7日、副大統領が出席した第三回交渉で、先住民、アフロ系共同体、農民、製糖業関係者の間で、対話による紛争解決を目指し、暴力は行使しないという協定が結ばれた。今回の協定がこれまで反故になった何百もの協定と同じ道を辿らないとはだれも保証できない。

出典: <https://cambiocolombia.com/> 2022年9月3日

編集後記

編集作業中に「レコム創立 30 周年」を読んでいると、スピーキングツアーなどのために来日した人たちを関西でアテンドした記憶のいくつかがよみがえってきた。ロサリーナさんのように何度も来日される人は少ない。2008 年に北海道で開催されたアイヌ・モシリ・サミットでは、北京の世界女性会議の帰途に彼女とともに日本に立ち寄られたことのあるニカラグアのロス・カニンガムさんと 13 年ぶりに再会できた。コナビグアやアティトランからきた人のなかには、2007 年にグアテマラ・テクパンで開催のアメリカ大陸先住民族サミットで再会できた人もいる。レコムが 1994 年にお招きしたルシア・キラさんもその一人で、京都の寺の縁側でとった写真には、今もスポーツジムの行き帰りに使っているボルサが写っている。 小林 致広



次回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2023 年 1 月 14 日（土）

発送作業は関西で、2023 年 1 月 21 日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 181	コロンビア大統領戦 依然続く紛争の現場から	Vol. 177	コロンビア 混乱の背景
Vol. 180	ハイチ共和国はどんな国？	Vol. 176	メキシコ・オアハカ州地峡部の自律的女性議会
Vol. 179	ニカラグア大統領選挙現地報告	Vol. 175	『裏切者』が米墨政府の汚職と麻薬カルテルの内実を暴く
Vol. 178	エクアドル大統領選挙と未来の行方		

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

- ☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員：年 10,000 円（一口）総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員：年 4,000 円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先（住所が変わりました）

〒678-0001

兵庫県相生市山手 2-502-1 大西方

お問い合わせは、郵便、もしくは E-MAIL でお願いします。

ホームページ：<http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail：recom@jca.apc.org

Facebook：

<https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座：00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコム一般口座 186 万 3466 円

グアテマラ基金 40 万 5919 円

（2022 年 10 月現在）

そんりさ (SONRISA) 182 号

2022 年 10 月 23 日発行

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

(RECOM) 定価 400 円